

## 研究分野の異なる研究者間の討議

青山 英康

当時の国際状況についての最低限の常識を持っている知識人であれば国家権力を総動員して押し進めていた無謀な戦争を阻止しなければならないと考えたであろう。しかし、下宿で読書に耽り親しい友人と激論を交わすことはあっても戦前・戦時中の研究者・学者は社会に対する責任を果たすことなく、国民の多数の生命や生活に大きな被害を与え、近隣諸国をはじめ世界中に甚大な被害を与えた歴史的現実への反省を迫られることになった。戦後、占領軍によって与えられた民主化に便乗した研究者の民主的な組織化の取り組みとして研究者各人の直接選挙によって代表を選出する「日本学術会議」が設立された。しかし与えられた民主化の基盤は「誤った母校愛」の強力な学閥主義によって社会的な批判の対象となる「醜い選挙戦」を繰り返して終止符を打つことになった。その後、学術組織による研究連絡組織の編成による組織選へと変質したが、此の改革に伴って、「地方区」や「特定の学術領域」とくに社会性の高い分野からの選出が抑制されて、「東京学術会議」、極端には「東京大学同門会」へと変質し、今日では会員の選出方法や選出母体が曖昧となり、学者・研究者の代表と考えているのは会員のみであり、会員以外の学者・研究者にとっては全く無関係の存在となって居り、「日本学術会議」に対する社会的な対応が不明瞭になったように思われる。

日本学術会議の意義や存在については、会員に選出されるまでは各種の学会の代表者の組織として、学術に関する国家的な意見を集約する権威のある組織と考えていたので、そのような組織に参加して意見集約に参加できる責任の重さを痛感した。しかし、総会ではなく部会（第16期・第七部）に参加すると当時の会員中で最も若い年代層に属し、任期中会議では一言の発言もしない高齢な会員が多く認識と実態との差の大きさに驚かされた。しかし、委員会活動などで幅広い分野を代表する会員との討議に参加して「学術会議」の存在意義を改めて痛感させられた。

わが国では、「討議」とは異なる意見を互いに主張し合い、一度主張した意見は最後まで主張し続けることが多く、論議展開や視点の違いを補正し合う場とはならない「闘い」の場となっている。そのうえ「多数派」が正しく、「少数派」は誤りと看做される為に、強引な大声の発言がとびかうことにもなる。

アメリカの大学院では小グループでテーマを定め、数冊の本を選び、1~2週間後に討議(Debate)をする授業を度々経験した。一人か二人がこの本に書かれている内容について「討議すべき点」を集約する報告をして討議が始まる。慣れないときには本に書かれている内容の紹介をして「報告者としての役割を果たしていない」と評価された。次に座長はただ発言者の順番を決める役ではなく、討論の経過に責任を持ち討議の展開に役割を果たす必要がある。さらに、最後の集約係は討議の内容を論理的に展開して結論にいたる纏めの責任を持たされている。このような役割を互いに分担し合って授業を進めていくことになる。毎回異なった役割を分担して採点の対象とされるのでクラスのメンバー全員が討議の展開に責任を自覚させられる。

学術会議では、科学の進歩の基礎となる「専門分化=Specialization」に必要な〔総合化=Integration〕についての「発想の転換=Paradigm — shift」を議題にして部会を超えての討議に参加して、久しぶりにアメリカでの授業の討議を思い出させる非常に楽しい経験をさせて貰った。国を含めて各種の委員会での討議では、行政側の好みと共に課題の専門家だけが集められる為に異

なった考え方や視点が提起されることがなく、結論を出すのは早いですが討議の内容に深みが無く批判を受けると容易に結論が覆る。しかし、その時には委員会は解散されて居り担当の行政官も交替している。例えば「予防注射の接種」についての専門家だけが集められるので、予防注射の必要性だけが幅広く情報として収集されるが、副作用や有効性の期間、感受性者の実態などについての情報は殆ど提示されることがない。我が国では感受性者の免疫に関する日常的なモニタリングがなされないままに伝染病予防策が論じられるために的確な予防策の確定ができない。

関連の学会・研究会が組織された「研究連絡委員会」や全国区に対応する地方区を復活し、会員の選出母体を明らかにして社会的責任を果たす学術会議に改革されることを期待したい。とくに最近の政治情勢が戦前の状況への復帰が危惧されている中で、戦前・戦中の学者・研究者の社会的な役割についての反省から日本学術会議が発足した事実を再確認すべきではないだろうか。

### ●プロフィール

青山 英康

日本学術会議 地域医学・医学教育両研連委員長

日本学術会議第 16 期第七部会員

岡山大学名誉教授（岡山大学医学部教授）

高知県立大学名誉教授（高知女子大学学長）

ジョンズ・ホプキンス学士会終身会員（Life-time membership of Johns・Hopkins Society of Scholars）

国際家庭医学会・日本代表（Council of WONCA: World Organization of Family Doctors）

国際労働衛生学会名誉会員（Emeritus membership of ICOH: International Commission on Occupational Health）